



The Language of the Beasts

by Tom Stoppard

produced to sell June 19th.

ネロの食卓

皇帝ネロの青い舌
ネロの舌は鋭敏で
いっさいのごまかしはきかない
たとえ、砂糖の1粒でも
違いが分かる青い舌

調理をするのは
雪解けの水しか知らぬ乙女たち
小さな小さなビン詰め悪魔
いずれも体毛そりおとし
体にガラスのヴェールをかぶる
悲しげに

食卓上にはお客が2人
1人は愛人ネロリッサ
2人は兄のジンバブエ
甘い甘いぶどう酒に
処女の血たらし杯に
悪の3人は杯を交わす

ジンバブエは大食漢
こんがり焼けたパンの上に
オリーブとはちみつをパンより多く
一口目がうまいのだと
さじ持つ奴隷に投げつける
ネズミさえも言う
目がつぶれてしまえ

ひどい悪食ネロリッサ
じゅくじゅく叫ぶ焼き鳥に
蜜と砂糖を振りかけて

尻の部分のわずかな肉を
むしり、頭を食いちぎり
奪ってごらんと口を出す
カラスさえも言う
顔がただれますように

王の美食家ハイネスネロ
まるまる太った赤ん坊
刻んで煮込んだスープをすすり
こんがり焼いた童貞の
二の腕皿に切り分ける
柔らかく蒸した乙女の皿を
火が通り過ぎていると突き返す

食後に罪の果実をかじり
冷たい氷室の氷を食す
これが罪ならさぞかしょうまかろうと
次の食事を夢見て眠る

アマリリス

ゆがんだ景色を生む
根は汚れず
抵抗もなく足を延ばす
赤い花卉をつけたとしても
青臭い種をつけたとしても
大地で眠る事はない
読まなくなった書籍に挟まれ
しけた引き出しに収まる
1年の眠りの後に
生を再開し
ガラスの時を謳歌する。

さいころ

鏡の面持つサイコロを
くすんだ真綿のじゅうたんに
ほうり、向いた面を見て
定まった笑顔を作る

鏡の面もつサイコロを
ハレムの女が編んだレースの
靴下の上にほうる
女はそれをつまみあげ
ざりざり砂糖の中につける
写る現実ごまかすために

鏡の面持つサイコロを
ざぶざぶ泡立つ海にほうる
きらきら面を翻し
魚に恥をかかせる

いつか、真珠の貝採る乙女が
鏡の面持つサイコロを
拾いつまみ上げたとして
そこに写るのは
さかなのため息
タコの鳴き声
無理やり見せられた
真実への怨叫

つゆよ

つゆよ

あなたはいずこにいて
涙を流すのでしょうか
ふきの葉を甘露で満たし
田に鏡を作る
土を香り高くし
一善の飯にも緑をわかす
もしも、もしも
全てのもものが死に絶えるとしても
あなたの涙を拭ってあげたい
つゆよ

つゆよ

食欲

高級レストラン

飾りのような前菜

浅い皿のスープ

鎧のようなエビを食べ

基石のようなケーキをつつく

「部屋をとってある」

とがった顎に細い足くび

時折震えるまつ毛

「ひげが伸びてる」

「ん」

「今日はかえる」

「なぜ」

「食べ合わせが悪そうなもの」

家に帰ってから気づく

あの料理に比べなんと

センスのない言葉だと

すぐさま、連絡する

「明日は中華料理がいい」

なんのことやら

でも名のつくものすべて

その名を呼ばれるためにある

それは私も彼も伊勢エビも

中華料理も変わりなく

体が求めるその前に

脳裏によぎるイメージが

私の恋の邪魔をする

振り切った食欲が
人の繁殖妨げる